オリジナル伝奇ノベル「ニ楽亭へようこそ!」

羽林久世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オリジナル伝奇ノベル「ニ楽亭へようこそ！」

【Ｎコード】
Ｎ１２２８Ｎ

【作者名】
羽林久世

【あらすじ】
砕かれた殺生石から生まれた狐の化精・葛葉（くずは）と静葉（しずは）。その霊力ゆえに、現世（うつしよ）の神霊事件を取り締まる弾正府の守護として、名刀子狐丸と狐ガ崎に封じられた。当代弾正府のＴＯＰ、西御門（にしみかど）学園に通う高校生那須野結繪（なすのゆえ）とナンバー２・化野音音（あだしのねね）の守り刀として、現世（うつしよ）で起きる不思議な事件解決に尽力中。古都鎌倉を舞台にした学園オリジナル伝奇小説、開幕です。

第1話　「凍結する西御門　襲来！　第二契約者」　第1章　その1

＞i10412―1489＜

序章

『むかしむかし、那須野というところに、
立ち昇る瘴気（しょうき）で近づくものを殺してしまう
殺生石という石がありました。
元を正せばその石は、
かの昔、朝廷に悪事をなした九尾の狐・玉藻（たまも）の前が
退治されたときにできたものでした。
その殺生石の話を聞いた、ときの帝が
僧・玄翁（げんのう）を遣わし殺生石を砕かせ、
それ以降、瘴気で生き物が死ぬことはなくなったといいます――
―』
これが普通知られている、
九尾の狐・玉藻の前と殺生石の簡単なお話。
だけど、そのお話には続きがあって…。

第一話　「凍結する西御門　襲来！　第二契約者」
第一章　その1

紹和20年3月31日――。

『――大本営発表。硫黄島守備隊ヨリ、
戦局ツヒニ最後ノ関頭ニ直面シ、
本日夜半ヲ期シ、最高指導官ヲ陣頭ニ
皇国ノ必勝ト安泰トヲ祈念シツツ、

全員壮烈ナル総攻撃ヲ敢行ス、
トノ打電アリ。
通爾(つうしん)後、硫黄島守備隊ヨリノ通信ハ絶エ……』
薄暗い部屋に、
ザザッというノイズ混じりのラジオからの声が、
日本の苦しい戦況を伝えている。
ゆらゆらと揺れる、部屋の四方に灯る百目ろうそくの光のなか、
平安時代の貴族のような束帯(そくたい)姿の男達が
ボソボソと会話を続けている。
「……硫黄島も落ちたか…」
「此度は、第二契約者どもの思惑に、
大和人がのせられた格好だが…」
「のらずとも、唯一の神を押し立てて、
ごり押しで乗り込んで来ていたであろうよ」
口の端に皮肉な笑みを、
扇で隠すようにしながら男は話しを続ける。
「このちは、米軍の動きに呼応して、
日ノ本に入り込んでいる契約者の先兵どもが、
鎌倉府を攻めるでしょうなぁ」
「現世（うつしよ）はいたしかたなし…。
人間世界を盾に幽世（かくりよ）を死守し、
何時の日か、日ノ本の精神を復興すべし」
「結局は“鎖国”しかあるまい…」
男たちは目配せして頷きあうと、
ゆらゆらと立ち上がりながら足元から消えはじめる。
「ことは決した…」
「ではこの後は、現世の世事は狐の姫たちにおまかせしましょうぞ」
「しましょうぞ…」
それを合図に、ろうそくの灯りがスッと消え、
部屋は闇に閉ざされる。

同年同日・鎌倉・西御門（にしみかど）――。
うちっぱなしのコンクリートの部屋には
通信機器が多数備え付けてある。
その機器の前に座るオペレーターたちは、
詰襟（つめえり）の学生服と、
セーラー服を着た高校生の男女。
彼らはひっきりなしに入る通信への対応に追われている。
その中の一人が、
はじかれたように立ち上がると、
振り向いて声を張り上げる。
「申し上げますっ！
い、稲村ヶ崎最終結界が突破されましたっ！！！」
「何っ！　ば、ばかな…。新田義貞に破られて以来、
強化し続けてきた結界だぞっ！」
部屋の中に動揺が走る。
「極楽寺に展開中の部隊を長谷寺まで下げろ！」
すかさずそう指示を出し、動揺を抑えたのは、
大きな兵棋（へいき）演習用の机の前に立っている
白い学ランを着た学生たちだった。
しかしそのあとも、
状況の悪化を知らせる情報が続々ともたらされる。
「坂ノ下、鷲部司（わしのべのつかさ）
鷲観（わしみ）伝十郎様お討ち死！
鷲部も被害甚大です！」
「狼部（ろうぶ）はどうしたっ！？」
「下馬四ツに部隊再集結中です。
現在、狼部司（ろうぶのつかさ）
三峯弦一狼（みつみねげんいちろう）殿のみ、
湘南海岸道路より坂の下へ先行中！」

「頼むぞ、弦一狼…」
白い学ランを着た中で、
ただひとり学帽をかぶっていた学生が、
机上の地図を睨みながらつぶやいた。

その2につづく

第1章　その2

鎌倉の海沿いは、
東西に湘南海岸道路が走っている。
その道を西の稲村ヶ崎から東の由比ヶ浜に向かって、
金髪碧眼の大男が悠然と歩いている。
その前に立ちはだかったのは、
どう見ても女子高生と巫女という風情の、
ふたりの女性だった。
「これはこれは、
西御門(にしみかど)弾正府(たんじょうのかみ)を統べる
弾正尹
化野(あだしの)美沙どの。
ご機嫌よろしゅう。
葛葉どのも、いい加減良いお歳でしょうが、
相変わらず見目麗しい。
このアレクサンダー・フォン・シーボルトの血も騒ぎますぞ」
「淑女に年齢の話をなさるとは、
とても紳士の所業とは思えないのです！」
葛葉と呼ばれた女性が憤慨した様子でいなす。
巫女服に身を包んだ彼女の頭部には、
まるで狐のような、
先端が白く、
その他の部分が茶色地の、
けものの耳が生えている。
そして、耳と同じような色合いで、
五つに分かれている、まるで狐の尾のような、
りっぱなしっぽも生えていて、
左右にゆっくりと揺れている。

>ｉ１０５１９―１４８９<
『良い歳』と言われていた彼女だが、
せいぜい２０歳ぐらいにしかみえない。
その隣にいるさらに歳若な、美沙と呼ばれた、
ショートカットにセーラー服の少女が、
ため息混じりにつぶやく。
「まったく、懲りない連中だね。
この前この国に、
おまえの父親がちょっかいかけてから何年たつんだ？
もう１２０年か…。
あんときゃ、将軍（だんな）が上手いことあしらって、
なにもかも不問にしてやったっていうのにさ。
いい加減、あきらめてもよさそうなものを…」
「ご冗談を。我ら貴族信徒は、
主の為であれば、
喜んで命を投げ出しますぞ。
もちろん平民とて同様」
シーボルトが、パチッと指を鳴らすと、
彼の影の中から、
無数の影がわき出してくる。
「外務卿・井上　馨（かおる）殿の特別秘書を足がかりに、
この極東の地にて、
我が教団の礎にならんと志して、百数十年。
そろそろ我が肉体にも限界を感じましてな。
一族を引き連れて、
弾正尹どのに挨拶にまかりこしましたしだいです」
「第３契約者との折り合いが悪いからって、
この日ノ本を世界制覇の足がかりにしようったって
そうはいかないんだよっ！！！」
美しい少女の面影からは

想像もつかない荒々しい言葉が、
美沙の口をついて出る。
「あなたを守護する金狐・葛葉殿とて、
いにしえの＜傾国＞の末裔（まつえい）。
人の味を一度覚えたら最後、
我らに同心してくださるのは…」
そこへ、すさまじいスピードで黒い影が飛来したかと思うと、
シーボルトの配下を打ち倒して行く。
「美沙様、葛葉様！　遅参いたしました！
三峯弦一狼、ただ今推参！！」
そう叫んだのは学生服を着た小柄な青年。
彼は自分の背丈よりも長い日本刀
＝六尺斬馬刀を軽々と振り回しながら、
敵を切り刻んでいく。
「お、おのれっ！！　狼風情が邪魔だてするかっ！！！」
部下を打ち倒され、シーボルトがうめく。
「ご苦労さまです～」
「弦一狼、ぬかるんじゃないよ！」
「承知！」
三人は声を掛け合うと、
シーボルトを目指して突進し、そして辺りは光に包まれ――。

第1章終わり
その3（第2章　その1）につづきます♪

第2章　その1

２０××年――。
多くの古刹（こさつ）や由緒ある神社が点在し、
関東の小京都といわれる古都鎌倉。
歴史のある街だけに、
曰く付きな場所は沢山ある。
ところがそんな場所以外でも、
幽霊やあやかしを見たとか、
不思議な現象が起きたとか、
そんな噂は日常茶飯事で引きもきらないし、
また実際に怪現象はおきる。
だけど、歴史があるから怪異が起こるわけじゃないの。
そんな現象の原因は、
朝廷の直轄領・鎌倉府の北東部
＝丑虎（うしとら）に位置する西御門（にしみかど）という場所近くに、
異界に通じる入り口があるってこと。
でもこれは、
普通の人にはほとんど知られてなくて…。

幼稚舎から大学までの
一貫教育で知られる
神奈川県鎌倉府立西御門学園――。
その中央に位置する高等部の建物は今時珍しい木造の建築物。
キンコーン――――。
お昼休みを告げるチャイムが鳴り、
授業を切り上げて先生が出て行った。
私の幼なじみで従姉妹で親友でクラスメイトの
化野（あだしのねね）音音が、

いっしょにお昼を食べようと、
お弁当を持って私の机のほうへやってくる。
音音は、身長は１５０センチぐらい。
柔らかそうなくるくるした髪をてっぺんでまとめいる。
同性の私から見ても、かわいいと思う。
＞ｉ１０５４７―１４８９＜
（これで変な趣味さえなければ言うことないんだけど…）
何となくそんなことを思って
ひとり苦笑する私に音音が、
「どうかなさいまして？」
と聞いてくる。
「何となく笑いたかっただけ」
私がそう答えるあいだに、
音音は、私の前に座っている子に席を替わって貰うと
その席に腰かけた。
「そういう気分のときもありますわね」
私の答えに納得したのか、
音音はお弁当の包みを開きはじめる。

音音とたわいもない話しをしながら、
お弁当を食べていると、
＜♪ちゃららん＞
と、携帯メールの着信音。音音のだ。
ほぼ同時に私のにも着信音が鳴った。
＜♪ちゃるるん＞
私が携帯を開く横で、
一足さきにメールを見終わった音音が、
「結繪ちゃん、
マリーちゃんの家がまた建てられたらしいですわ」
「えぇ？　またぁ？」

私のメールもおんなじ内容たった。
音音のメールも私のメールも、
発信源は、
いまや鎌倉府の住民の必需アイテムになりつつある
鎌倉府が希望者に送っている鎌倉防災メール。
鎌倉府の怪異に備えて、
事件などが起きれば直ちに配信されてくるようになってる。
“マリーちゃんの家”といえば、
確か私が小学校のころから、
合計3回は建てられてると思う。
有名な都市伝説だから、知ってるも多いと思うけど、
魔法を使うことで有名なマリーちゃんの家が、
鎌倉府の山の上にひっそりと立っているという噂話。
じつはあれ、都市伝説じゃなくて、
ホントに時々建つ。
「まだ、こんな古くさい手を使うヤツがいるなんて驚きですわ」
「でもほっとけないし…放課後行く？」
「みんな忙しいから、仕方ないですわね」
鎌倉のネイティブなら、
こんなモノには引っかからないけど、
観光客とかが時々現地に見に行っちゃうから
少し心配なんだよね。
なんで私がこんな心配してるのかというと、
ウチの学園はちょっと特殊な事情があって、
これまたちょっと特殊な自治体・鎌倉府の
神霊・あやかし関係の警察業務を行う弾正府を兼ねてる。
私と音音も弾正府の一員なので、
こういう事件があれば、
対応しないといけないんだけど…。
でも、立ち入り禁止表示テープは張り巡らしたって

メールに書いてあったから、
平日で観光客も少ないことだし、
あと3時間ぐらいは大丈夫でしょ？
授業が終わってから急いでいけばいいよね。

……なんて考えていた私たちが甘かったみたい…。

その2に続く

第2章　その2

私と音音は授業を終えたあと、
護衛がわりに幼なじみの同級生・
三峯三狼（みつみねさぶろう）を伴って校門を出た。
三狼は名前の通り、狼に守護された狼部・三峰家の次男。
弾正府を守る十三の家・十三部集の中でも
最強と言われている狼部だけどあんまり強くない。

私たちは3人とも弾正府の人間なので、
帯刀しても大丈夫なんだけど、
目立つので竹刀を入れる袋に入れて行く。
雪ノ下から大町、材木座へ抜け、
幽霊トンネルの異名を持つ
名越トンネルを通り、
その途中で厨子マリーナに続く道に曲がる。
情報では、
その道の東側、小高い山の上にマリーちゃんの家があるという。
ハイキングコースのような
舗装のされていない道へと足を踏み入れていく。
泥道でシューズが汚れるよう…。
途中で三狼が、
「人の匂いがする」
と、辺りの空気を嗅ぎながら言った。

三狼の鼻が利くのは折り紙つきなので、
誰かが入り込んだ可能性が高い…。
現場に急いだものの、
そこに着いたときには、

すでに立ち入り禁止表示テープは切られたあとだった。
そして、その向こうの、
ぬかるんだ土の上には、
５人分ぐらいの足跡が三角屋根のマリーちゃんの家の玄関へ向かって、
くっきりと残っていた。
「あちゃー」
「結繪ちゃん、まだ間に合うかもしれないですから、急ぎましょう」
確かに音音の言うとおり、
こうなると一刻を争う。
ドアをドカッと蹴り破って中に侵入する。
女の子としてはどうかと思うけど、この場合は仕方ない…。
マリーちゃんの家は、
外から見ると結構広そうに見えたけど中は狭かった。
そして内部の、
まるで”肉”で出来ているようなぶにぶにした壁に、
５人の男女が両手を広げた格好で拘束されていた。
顔は土気色をしていて、
かなり生気を吸われている感じだ。
でもよかった、まだ息がある。
これなら助かる。
三狼が自分の背丈に近い１６０センチ斬馬刀を鞘から抜くと、
手近にいた女の子の戒（いまし）めを切り裂いていく。
私も愛刀・子狐丸の鯉口を切り、
拘束している肉に斬りつける。
＞ｉ１０５６３―１４８９＜
音音も同じように愛刀・狐が崎で肉を切り裂いていく。
すると……。
「ぐぎゃああっ！！！」
突然天井から不気味な叫び声が聞こえて、

天井いっぱいに大きな顔が現れた。
「貴様ら、何をする！
そんなモノで切ったら口内炎になるではないかっ！」
それを聞いた音音が、
怒りを含んだ声で答える。
「どこの妖(あやかし)か存じませんが、
この鎌倉府で不逞(ふてい)をはたらくなんて
良い度胸をしてらっしゃいますわ」
「早く病院にはこびたいんだから、
大人しく解放しないと、痛い目みてもらうけど…」
「ふん、小僧と小娘ふたりが凄んだところで
痒くもないわっ！　ほれっ！」
そのかけ声とともに、
触手が地面や壁から生え出してくる。
伸びてくる触手を切り落とすものの、
数が多すぎてきりがない。
しかも切り口からは、ねっとりとした血が流れ、
脂分が濃いのか、あっという間に刀の切れ味が悪くなってくる。
こいつ、メタボリックなんじゃ、と気を取られた隙に
調子に乗った触手に制服を切り裂かれた。
やーっ！　下着が見えちゃう！
しっかりそれを見たらしい三狼が、鼻血を出してその場でしゃがみ込んだ。

第2章　その3に続く

第2章　その3

「あっ！　三狼こっち見るなーっ！」
そう言って怒鳴る私の横で、
音音もこっち見てはぁはぁしてるし…。
そうこれ…、
これが音音の困った趣味。
音音って、普段はクールだけど、
レズっ気があって、
ちょっとエッチなスイッチ入ると
見境なく私を襲ってくる…。
今もそんなスイッチが入ったらしく、
なんだか目つきが怪しくなってるんですけど…。
あー、もうっ！
音音がそんな困ったHモードになったのも、
みんなこの妖怪がいけないんだからねっ！
「このエッチ妖怪！！
急いでるって言ってるでしょ！」
そう言ってるのに、大人しくなるどころか、
更に触手の数が増えて襲ってくる。
「もう！　言っても聞かないんじゃ、
しょうがないよね！」
そう声を音音に投げつけると、
はっと正気に返る。
「そ、そうですわね」
そう返事をする音音と目を合わせると、
私は愛刀・子狐丸を天に向けて、
「かけまくもかしこき稲荷大神の大前に、
かしこみかしこみももうさく…」

と稲荷祝詞(のりと)を上げ始める。
音音は、愛刀・狐が崎を地面に向け、
「本体真如住空理……」
と稲荷心経をとなえる。
＞ｉ１０６２１―１４８９＜
すると中空から、
狐耳に狐のしっぽのある
ふたりの美しい巫女様が姿を現す。
ふたりは私と音音が契約する守護妖、
五尾狐の有明葛葉ねえさまと
四尾狐の阿部静葉ねえさま。
１３８５年に玄翁和尚が殺生石を砕き、
そのとき飛散したかけらから顕現(けんげん)したふたりは、
せいぜい２０歳ぐらいにしか見えないけど、
ホントはもう６００歳に近いらしい。
普段は西御門学園内にある
空中庭園二楽亭に住んでいて、
こんなときには力を貸してくれる。
「うー、なんですか、狢(ムジナ)臭いのです～っ！？」
出現するや、葛葉ねえさまが呻(うめ)く。
「臭すぎますわ～～っ」
ふたりとも、少しでも悪臭を防ごうと、
顔の前に巫女服の裾をかざして、鼻を隠してる。
そうか、相手は狢なんだ…。
狢といえば、狸の親戚。
ウチの学校にもエロ狸がいるけど、
道理でエロい感じがすると思った。
「葛葉ねえさま、静葉ねえさま！」
「あらあら、結繪さん、
その格好はどうなさったのですか！？」

私のスカートが破れてるのに気づいて
そう言ってくれた葛葉ねえさまに、
「それより、
この人達を病院に連れていきたいんですけど、
この狢が言うこと聞いてくれなくて」
と窮状を訴えると、
葛葉ねえさまと静葉ねえさまは、黙って頷いた。
立ち上がって私に背を向けると、
「ここからは、
私たちがお相手してさしあげましょう。
あなたたちは、その間に救護を呼びなさい」
そう言って袂(たもと)から御札を取り出し、
部屋の四方に投げつけると、
何事か祭文を唱え始める。
「こ、この祭文は稲荷の…。
ぐげげげげげぇ、なんで稲荷神の眷属(けんぞく)がここに…」
狢が驚くのには構わず、
祭文を上げつづけるふたり。
そして最後に、
「えいっ！」
とハーモニーを奏でるように
気合いを掛けると、
御札から文字がトゲのように突き出して、
辺りを貫いていく。
「ぎゃああ！！！」
あたりの肉壁が消え、
普通の林の風景に戻った。

その6に続く。

第2章　その4

あとには狢がごろごろと転がりながら泣き叫んでいた。
「ううう、お、お助け～～っ！
い、いったいあんたらは…」
「だから、ここは鎌倉府で
あやかし関係の事件は、弾正府の管轄なのっ！」
私がそう怒鳴りつけると、
狢がガクガクと震え始める。
「じゃ、じゃ、じゃ、じゃあ、
あなたさまは、もしかして…」
「うん、私は弾正尹那須野結繪。
こっちは弾正忠化野音音。
よっく見知りおけ」
「はっ、はは――っ」
地面に頭を擦りつけ平身低頭する狢。
いばり返るつもりはないけど、
これだけのことをしでかした狢には
罪の重さをちゃんと実感してもらわないといけない――と、思ってたら、
静葉ねえさまが、
「まぁまぁ結繪ちゃん、
狢さんも反省してるし、
その位で勘弁してあげてもいいんじゃない？」
と助け船を出してきた。
「その代わり、
狢さんにはちょっと
お願いしたいことがあるのですよー」
と葛葉ねえさま。

「そ、それはもう…」
一も二
「ご飯おごって▽」
「なんだ、そんなことですかい。お安いご用だ」
と言って狢は得意げに小判数枚を取り出した。

狢に生気を吸い取られた連中を
駆けつけてきた救急隊員にお願いして、
静葉ねえさまのリクエストで、
二の鳥居の側にあるウナギの名店
『浅場屋』に移動した私たち。
ここは、静岡県吉田町産の
大井川の伏流水で育てられたウナギを使っている。
狢の奢りだということで、
遠慮無くうな重と日本酒を頼んで、
葛葉ねえさまと静葉ねえさまはすっかりご満悦。
このふたり、
すごく頼りになるのはホントにありがたいんですけど、
ちょっと働いて貰うといろんなモノを大食するので、
経費もバカにならない。
とくに静葉ねえさまはうわばみなので、
飲み始めるとキリがないし…。
＞ｉ１０７１５―１４８９＜
私と音音も１人前、
出血多量で貧血な三狼も２人前を戴く。
まあ、今回は、
狢が例の小判を古物商に売りさばいたお金で、
病院送りにした連中の入院費と
浅場屋の食事代は事足りそうで、
一応万事めでたし――。

と思った所へ、
さっきの古物商のオヤジが飛び込んで来た。
「この狢！
葉っぱの小判出すとはふてえ野郎だ」
「え、もうバレたの？」
「バレたって、
あんた最初から騙すつもりだったの？」
「いやあ、
こっちの世界くんの２００年ぶりぐらいだから、
勝手が分からなくて…あ、はは…は…」
アホな顔してへらへら笑ってる狢は無視して、
店の厨房の方へ向かって叫ぶ。
「すみませ～ん！
なんか狢つるすのにいい棒ないですか？」
それを聞いて真っ青になった狢は、
「ま、まさかあっしを狢汁に……」
と言いながら私の足にすがってくる。
「仕方がないでしょ。
お代はカラダで払ってもらわないと」
身に危険を感じ、冷や汗をだらだらと流す狢に、
そこにいた全員がほほえみながら近づいていった。

結局、文無しだった狢は、
西御門学園の雑用を
４ヶ月ほど無賃で働くことになりましたとさ。

第３章　その１につづく。

第3章　その1

『――当機はまもなく小笠原上空にさしかかります。
成田への到着時刻は――』
そのアナウンスの最中に、
突然、乗客のひとりが苦しみ始め、
ＣＡや、たまたま乗り合わせた
医師による手当もむなしく絶命した。
医師による所見は心臓発作。
成田到着後、
空港検疫所で警視庁係官立ち会いのもとで検視を受け、
翌日、東京都監察医務院で行政解剖が行われた。
遺体と遺品は、
名乗り出てきた遺族に引き取られることになっている。
死亡した男はロシア人で、
名はレフチェンコ・スミルノフ。
遺品には、通常の着替えなどのほか、
古びた釘が１本、
クッションのしかれた箱に大切に保管されていた。
不思議に思った係官が、
受け取りに来た遺族のロシア人であろう人物に、
「立ち入ったことでなんですが、
その古い釘はなんですか？」
と訪ねたところ、
「＜聖釘（せいてい）＞…、
ああ、いや、思い出の釘なのですよ」
といらえがあった――。

日のあるうちは風情がある鎌倉の裏路地も

夜になると物寂しい。
特に山のきわとか、谷戸のあたりとか、
人通りの少ない場所だとちょっと不気味だ。
山の斜面にある”やぐら”など、
鎌倉時代の横穴式のお墓も点在していて、
なにかの怪異に出くわしそうな雰囲気の場所も結構ある。
実際、馴れてない人や子供だと、
あやかしに行き会ったり、
狢、狸たちに化かされたりすることもあるので、
驚いて怪我したりという話も
ときおり聞こえてくる。
それに加えて、
最近は『鬼』まで出るようになっていた――。

私のウチに続く路は、
途中からは車も通れないような細い路地になる。
そこを、同級生の三狼と歩いている。
いつもは寮暮らしなんだけど、
ちょっと取ってきたいモノがあって
家に帰ることにしたら、
護衛代わりに連れていけと三狼を付けられた。
もともと家が隣同士なので、
寮に入る前は学校の行き帰りは
ふたりいっしょなことが多かったのを
なんとなく懐かしく思い出す。
子供の頃ふたりで、
夕方暗くなった路地を、
ぽつんぽつんとある街灯の明かりをたどるようにして急いで帰ったなぁ…。
私の家は、

北鎌倉から小袋谷を通り
山崎の奥、鎌倉中央公園の先にある。
高校生になった今でも、
夜になると人通りがほとんど無くなるこの道は
かなり寂しい感じがする。
（お腹空いた～、早く帰っておかあさんのご飯食べたい～）
そんな私のささやかな希望を邪魔するように、
＜びちゃ…ぐちゃ……＞
という、何とも言えない下品な感じのする音が、
横手の私道の奥、
玄関灯も点けずに闇がわだかまっている場所から
かすかに聞こえてくる。
普通の人なら気がつかない程度の音だけど、
これ、たぶん『鬼』たちの咀嚼音……。
何を食べてるか知らないけど、
いつ聞いても、あいつらの品のない食べ方は
耳障りなのですぐ分かる。
理性も品性も感じられないんだもん――。
音のするほうをうかがうために、
カバンから鏡を取り出す。
それを塀の角から少しだけ覗かせて、様子を探る。
＞ｉ１０７３９―１４８９＜
（イラスト　ムシ長者さん）
あー、やっぱいた…。

第３章　その２につづく

第3章　その2

角もしっかり生えてる。
もう第3期だ…。
でもさすが、スーパーシングルタスク。
本来気配には敏感なはずの鬼なのに、
食事に集中してるので、
私の接近にもまるで気付いてないよ。
どっかのファストフード店のゴミを盗んできたのか、
ゴミ袋からハンバーガーを一心不乱に漁ってるのが、
暗がりの中でかすかに確認できた。
しかし、なんで私の帰り道に居るかなぁ？
だいたい、いっしょにいるのは、
弾正府狼部（ろうぶ）の所属の護衛とはいえ、
ひ弱な三狼（さぶろう）だし。
本来狼部といえば、
弾正府十三部衆の中でも、最強と言われる武門。
だけど、三狼は、
身長165センチ、55キロと、
お世辞にも屈強とは言えないタイプであんまり頼りにならないし…。
だからといって
『鬼』をこのまま野放しにもしておけないし…。
そう思い悩む私に、三狼は、
「結繪ちゃん、ここは弾正府に連絡して、
プロにまかせようよ」
と有り得ない提案をしてくる。
「なっ！？　なにバカなことといってんの？」
（あんただって、そのプロでしょっ！！？）
っと心の中でつっこんでみるものの、

「でも、危ないし…」
と、どうやら戦う気ゼロらしい。
「わかった…。一応、本部に連絡しといて」
「うん」
返事しながらケータイメールを送信する三狼。
さっきもう元には戻れないって言ったけど、
『鬼』ってもともと人間なの。
日本人の7割が感染してると言われる鬼化ウィルス。
そのウィルスが発症すると鬼になる。
ウィルスの保菌者が、
異常に落ち込んだり、過度のストレスを抱えたとき、
陰の気を持った妖異に取り付かれると発症すると言われている。
第1期は、ちょっとしたことでも過剰に反応したり、
キレ易くなったりする。
第2期は、感情の起伏がさらに激しくなり、
犬歯が鋭くなったり、爪が硬く尖ったりした上に、
暴力的になる。
そして第3期は、角が生えたり、
体格が2周りほど大きくなるなど容貌変化のほか、
さらに粗暴になり、理性的な会話はほぼ不能になる。
鬼化ウィルス自体は、
古細菌＝アーキバクテリアの一種なので、
古来から存在していて、
人に定着しているものの、
よほどのことがないと発症しない。
これまでに
酒呑童子や茨城童子や紅葉など、
鬼化ウィルスが発現した例が数例、古文書に見えるけど、
数えるほどでしかない。
つまり、殆ど発症するとはなかった。

ところが、この２０年の間に
発症例が１０数例報告され、極秘裏に処理されてる。
それだけでも、異常に多い。
最近は、突然キレて無差別殺人に走ったり、
自分の親や子供まで手にかける悲惨な事件が多発してる。
この１年についていえば、
発症数から類推して、
そうした事件を起こした犯人の１／３が
このウィルスの第１期の可能性が高い。
鬼退治も弾正府の仕事のひとつなので、
パトロールなども増えてすっごく忙しくなってる。
現に今だって、私が見つけちゃうぐらいだし…。
「ーーでも、ヤツが移動するようなら…」
視線を戻すと、鬼は立ち上がって歩きはじめる。
「あっ！？　動いたっ！」
もー、仕方ない、こうなったら、
私がやるしかないじゃん。
だって私は、
弾正尹那須野結繪（だんじょうのかみ）。
人間で言えば対妖摩の警視総監なんだから！
私は、愛刀小狐丸の鯉口を切りながら飛び出して、
「待ちなさい！」
と、鬼に声を投げつける。
＞ｉ１０７８１―１４８９＜
その声に反応する鬼の反射速度は尋常じゃない。
鬼の長い手が、
とっさにしゃがんだ私の頭上をかすめる。
もう、危ないなぁ。
こんなになっても、もとは人間。
だから、最小限のダメージで動きを封じて、

対鬼用の施設に送らなきゃいけない。
それを私の力だけでなんとかしないと…
と人がシリアスに悩んでいると、
後ろから三狼が声を掛ける。
「結繪ちゃん、パンツ見えてるっ！」
って、
「え？　キャ――っ」
バ、バカサブ、何言ってんの！？
そんなときは見ても見ないふり、
いいえ、見ないのが紳士ってもんでしょ？？
ビリッ！！
気を取られている隙に、
鬼の爪がスカートを切り裂いた。
もうヤダ！　パンツが見えちゃってる――。
恥ずかしくて、思わずその場にしゃがみ込むと、
鬼がよだれを垂らしながら、近づいてくる。

第3章　その3につづく。

第3章　その3

私を助けようと、
三狼が木刀で殴りかかるけど、
その木刀をものともせず、へし折りながら、
道にそそり立つ竹矢来(たけやらい)に三狼を吹き飛ばす。
バキバキと竹の折れる音とともに
竹矢来がなぎ倒される。
「三狼―っ！」
メチャメチャに折れた竹の間で、
起き上がろうともがく三狼だけど、
上手く起き上がれない。
脇を押さえてるから、きっと肋骨が折れてる…。
三狼に気を取られた瞬間、
鬼の殺気が私に向かってくるのを感じた！
（やられるっ！！）
そう思って目を瞑(つぶ)る私に、
「待たせたなっ！」
という頼もしい声が降ってきた。
刀身が１８０センチもある六尺斬馬刀(ざんばとう)の峰で、
鬼のするどい爪の一撃を防いで立っているのは、
私の憧れの人、
狼部筆頭三峯二狼(ろうぶひっとう)にいさまぁっ！
きゃーん、いつ見てもカッコイイよぉ！！
「あ、ありがとうございます！！」
「弾正様、お怪我は？
なさそうですね。あとは私にお任せを」
そう言っうと、
破れたスカートを気遣って私に上着をくれると、

軽く鬼あしらい、そのみぞおちに一撃をくらわせる。
動きが鈍った隙に、
力封じの札を鬼の額に貼り付ける。
それはほんの一瞬の出来事。
「にいさま、ありがとう。
でも、弾正様はやめてって言ってるでしょ？」
貸してもらった上着で
破れたスカートをフォローしながら話しかける。
「我ら狼部は弾正様に仕える身。
いくら幼い頃からの知己とはいえ、
例外を作ることは許されません。
とくに人前では…」
ひさしぶりに二狼にいさまとお話できそう――
って思ったら、
「痛っ――――っ！」
という絶叫。
振り向くと、
三狼が駆けつけてきた救急部隊の担架に乗せられてるとこだった。
って私、一瞬三狼のこと忘れてたよ…。
でも、同じ兄弟なのに、
どうしてこんなに二狼にいさまと違うんだろう??
そう思っても、三狼は幼なじみだし、
放っとけないよね。
「二狼にいさま、私、三狼についてくね」
「申し訳ありませんが、
こちらの検分などありますので、
そうしていただけると助かります」
「上着ありがと。明日学校で返すから～」
そう言うと救急車に乗り込んだ。

救急車の中で気を失った三狼。
病院で検査すると、肋骨2本が折れていて、
そのまま入院することになった。
三狼のお姉さん、
三峯家の長女、一子(いちこ)ねえが来るというので、
それまで病室にいることにした。
三狼ってば、
相手が鬼とはいえ、
狼部の人間が一発殴られただけで
肋骨2本はいかんだろ？
寝ている三狼の前髪をたくし上げてみる。
こんなに二狼にいさまに似てるのに…。
「このばかちん。
…でも、ごめんね、独断で動いた私のせいだ…」
そのときコンコンとドアをノックする音がして、
一子ねえが入ってきた。
＞i10804—1489＜
「結繪ちゃん、ありがとね」
「いいえ」
「コイツ、もともと丈夫じゃないとはいえ、
肋骨2本で気絶とはね…」
「でも、肋骨にヒビが入ると息するのも大変だって…」
「三狼も、三峯家の末弟でさえなければね…」
「……」
「我ら狼部、
武をもって結繪ちゃんに仕えるもの。
十三部衆最強でなければならないの。
だから…ね……」
「でも三狼にだって良いトコはあるんだよ」
「ありがとう。

今日はもう遅いから。
部下に送らせるね」

第３章　その４へつづく

第3章　その4

翌朝、西御門学園へと向かう。
でも、
心に何かひっかかるような感じがして落ち着かない。
今日、本当なら横にいるハズの三狼が入院中で居ないせいだと
自分を納得させようとする。
でも、30分の登校時間がすごく長く感じた。

教室には向かわず、
学園の敷地内にある、武道棟を兼ねる弾正府に出仕すると、
白ラン姿の鳩部筆頭で生徒会長な宮本が待っていた。
>i10835―1489<
「こんな朝早くからなんですか、Qちゃん先輩？」
「鳩太郎です！
それより、夕べの鬼の件ですが……」
「最近ひっきりなしだよね」
「いくらなんでも多すぎると思いませんか？」
十三部衆のシンクタンク・鳩部のQちゃんが、
こんな持って回った言い方するときには必ず何かあるんだよね。
「…裏がある？」
「ご明察です。
今回捕らえた鬼から分離したウィルスは、
遺伝子に人工的にいじられたあとがありました。
妖異にとりつかれなくとも、鬼化します」
その言葉を聞いた途端、
胸がもやもやするような、
朝の嫌な感じが蘇る。
「……Q、なんで、遺伝子を調べた……」

「狼部の三狼殿が発症いたしました…」
「…そ、そんな…。三峯家といえば、
狼の神に祝福された家柄なのに…。
鬼化なんてありえないっ！！」
私の投げつけた言葉に
Q太郎が冷静に応答する。
「その通りです。
低俗霊など妖異に取り憑かれて発症する鬼化ウィルス。
万が一発症したとしても、
われわれ十三部の家の者なら
NK細胞（ナチュラルキラー）で
すべて押さえ込めるはずです。
なのに三狼殿は…」
「発症したっていうの！？
ーーーそれで、三狼はどうしたの？」
「夕べひと晩で第3期にまで進行したため、
これ以上、病状を進行させないために凍結処置に…」
「第3期っ！？　ひと晩で！？
そんなことって…。
それに凍結…処置…って、
まだ実験中の技術じゃない！
それを使ったの！？」
「一子さんの意向です」
「一子ねえの…」
「そうですーー」
いつの間にか部屋の中に入って来ていた一子ねえが
話しに割り込んでくる。
「ーーウィルスの進行を止めるには、
もうそれしかなかったの。
三狼は弾正様の幼馴染であると同時に

私の弟でもあります。
ですから最善と思う方法をとらせていただきました」
一子ねえの言うことは分かる……だけど…。
「――まだ話は途中なんですけどね…」
と一子ねえを睨(にら)みながら言うQ太郎。
そのケンの有る声を遮(さえぎ)るように、
「ふたりとも、そのくらいにしてよ」
と仲裁する声が後ろから聞こえる。
この声って…三狼…でも…そんな…。
鬼化の第3期って…
角が生えて、醜くなって…
そう思うと振り向くのが怖い――。

第3章　その5につづく。

第3章　その5

…恐る恐る振り返ると、
そこにはいつも通りの三狼が立っていた。
「さ…ぶ…ろう…、
角は……第3期だって聞いてたのに…
大丈夫…なの…？」
「うん、いつもより調子いいくらい」
「――よかった…」
思わず三狼に抱きつくと、
「わー、結繪ちゃん、ダメ、抱きついたらボク…」
と言うと三狼が慌てて私を引き離す。
でもつぎの刹那、三狼の体から、気がわき上がり、
右の額から角が生え始め、制服が破れていく。
上背は二メートルは超えているだろう。
腕も太ももように太くなっている。
三狼は完全に鬼になっていた…。
なに？　いったい何が？
三狼と一緒に来ていた医部・鹿苑寺（ろくおんじ）配下の
ミニスカ看護師さんが、
こんな状況にもかかわらず、妙落ち着いていて、
「鹿苑寺先生の話だと、
興奮すると、生き残ったナチュラル鬼化ウィルスが
通常の三倍頑張っちゃって、
鬼化しちゃうそうです。
鬼化した体は、
完全に三狼さんの意識制御下にあるので、
問題はないそうです」
と説明してくれた。

>i10814―1489<
「――なんだって。
だから結繪ちゃん、
もう、急に抱きついちゃダメだよ」
や――っ！！
三狼のカワイイ声で、
いかつい鬼がしゃべってる～～っ！
あっ！　興奮すると鬼になっちゃうってことは…。
「…って三狼、私に抱きつかれれて、
何コーフンしてるわけ？
このむっつりスケベっ！！」
そう言って向こう脛（ずね）を蹴飛ばした途端、
鬼三狼は、
プシューっという音を立てて縮み始める。
「興奮状態から醒めると鬼化も解けます」
とミニスカ看護師。
「変な所で鬼化しないように気を付けないと、
大騒ぎになっちゃうよね」
あはは、と笑いながら言う三狼。
元に戻ったのはいいんだけど、
服は破けてびりびりで、
ほぼ全裸状態だった。
そこに何も知らない音音がやってきて挨拶した…。
「みなさま、おはようございます。
今日も良い天気ですわね。
清々しい朝は、清々しい一日の…」
股間に揺れるアレも、
そのまま全部見えてる状態の三狼を目撃した音音…。
「きゃあぁっっ――！！　何なに！？　何なの！？
三狼っ、あなた、何で全裸なのです？

さっさとその変な物をおしまいなさいっ！！！」
と絶叫しながらその場にへたりこんで失神した。
おお、化野家の一人娘にふさわしいお嬢様っぽい反応！

医部から報告では、
三狼は冷凍処置後に異常な発熱をして、
その際、
遺伝子操作されたウィルスは壊滅したらしい。
三狼の体温は一時４３度にまで達したというのだ。
発熱の間、完全鬼体化したものの、
凍結処置を施すために体温を低下させると、
熱が下がるにつれ鬼化が退行し、
人間の姿に戻り、意識を取り戻したのだという。
今三狼の体内に残っているウィルスは、
遺伝子操作されていない通常のものばかりらしい。
このプロセスが解明されれば、
一気にウィルスを壊滅できるかと思った私だけど、
通常の人では、
ウィルスが死滅する４３度という体温に耐えられないらしい。
人の発熱の限度は４２度。
それ以上は脳のタンパク質が焼けてしまうんだとか…。
そうなると、やっぱりこのウィルスをばらまいている連中を
捕まえるしかない。
このウィルスを扱えるということは、
当然ワクチンを完成させているはずだから――。
医部はこの遺伝子操作されたウィルスを
悪魔＝「ディアボロ」と名づけた――。

（とりあえず、三狼が無事でよかった。
でも、三狼、ああ見えて、鬼化してなくても結構筋肉質で…／／／。

や――っ、あんな映像は記憶から消去しなきゃっ！）
「あ…男なんて…不気味な…」
そんな私の自問自答を邪魔するみたいに呻く音音は未だに目が覚めない。
音音の額の上のタオルを取り替えながら、
とにかくディアボロのワクチン作りを急がせなきゃと思った。

第４章へつづく

第4章　その1

鎌倉府のもっとも重要な霊的方角は、
鶴ヶ岡八幡宮の艮（うしとら）にあたる西御門（にしみかど）。
その艮＝鬼門に府立西御門学園は立っている。
校舎のすぐ裏が山になっているので、
体育館の裏などは、うっそうとしていて、
昼間でも薄暗くて不気味な感じがする。
そんな体育館裏の道を、
長い髪を、リボンで後ろにまとめた
高等部2年・那須野結繪が歩いている。

その細い腰には、
ホルスターのようなベルトに、
大刀と小刀を帯刀（たいとう）している。
結絵が体育館の角に近づくと、
その前方を、3人の男子生徒が塞（ふさ）いだ。

どんな学校にも『不良』と呼ばれる類は存在するけど、
私の通う西御門学園は違うと思ってた。
でも、今、私の目の前にいるのは、
この禁煙主流のご時世に、
この若さでタバコふかしている、
いかにも頭の悪そうな男子生徒3人。
これはどう見てもステレオタイプの不良男子生徒だよ…。
「高校って、
別に義務教育じゃないんですから、
そんなアピールしてまで、
学校に来る必要なんかないんじゃないですか…」

「なんだとっ！？」
「ここが近道なので、通りたいだけです。
ただ…私の通り道で、タバコを吸って欲しくないなぁ。
――臭いから」
「それは俺たちにどこかへ行けってことか？」
「はい▽」
「なんだとっ！」
満面のほほえみで答えて上げたのに、
頭から湯気が出そうなほど怒ってる。
まあ、当然の反応かな。
「だいたいあなたたち、
ホントはウチの生徒じゃないでしょ？」
なんて言ったら、更に怒ったみたいで、
みるみるうちに変身していく。
筋肉が盛り上がり、
爪が伸びて、角が2本生えてきて……はい、鬼のできあがり♪
「やっぱり鬼化ウィルスのキャリアかぁ…」
日本人は、もともとこのウィルスの感染者が多いんだけど、
キャリア当人が思い切り落ち込んで、
更に陰の気を持ったあやかしに取り憑かれないと発現しない。
だいたい普通は、
発現すると言っても、
第1期では、キレたり、無差別殺人に走るだけで、
鬼に変身するケースなどほとんどない。
ところがこのウィルスに遺伝子操作して、
ちょっとキレるだけでも鬼に変身するよう細工したヤツらがいる。
今、ウチの生徒会や体育会文化部連合が、
必死で犯人捜しをしてる最中。
あ、ウチの高校、ちょっと特殊で、
異界＝幽冥界との接点になってる鎌倉府を守護する弾正府を兼ねて

るの。
だから、生徒の３／４ぐらいが、
ずーと昔から、
あやかしとの契約関係を持つ家の出身者とその家来筋で占めてる。
そして、そんな生徒すべてが、
天狐・葛葉ねえさまと契約している私、
弾正尹（だんじょうのかみ）・那須野結繪の配下になってる。
それ以外の一般生徒は、
文武のどちらかに優れた成績優秀な人しか入れないハズで、
こんな不良がここに居るはずがないんだよね。
「剣術は習ってるけど、
鬼相手に手加減出来るほどの腕前じゃないので、
あばらの２、３本は覚悟してね」
そう言いながら、
体勢を低くして愛刀小狐丸に手を掛ける。
＞ｉ１０８５９―１４８９＜

第４章　その２につづく

第４章　その２

この子狐丸は平安時代にやんごとなきお方が、
刀鍛冶の三条宗近と
伏見稲荷の神霊に鍛えさせたという刀で、
刀身に狐の絵が彫ってあるのがかわいい。
その鍔（つば）に指をかけ、
鯉口を切る。
――と同時に、刀を寝かせて、
右に一回転しながら刀身を相手の胴へと叩き込む。
直後、左に旋刀してふたり目をなぎ倒しながら、
３人目には地面を刷り上げるようにして横腹を峰打ちで一閃する。
私が走り抜けた後、
鞘に刀を収めると同時に３人が倒れる。
（うーん、決まったっ！）
と思ってたら、
「結繪ちゃん、カッコイイって思ってますわね？」
と頭上から声が降ってきた。
「音音――」
いつからそこで見ていたのか、
大ぶりのクヌギの枝の上から私の横に飛び降りてくる。
あ、スカートがまくれて、
レース使いの白の大人パンツが丸見えになった。
音音、エロい……。
＞ｉ１０９２１―１４８９＜
音音は、同い歳で、親戚で、幼なじみで、
この弾正府では、
ナンバー２弾正忠（だんじょうのちゅう）として私の補佐をしてくれてる。
沈着冷静で才色兼備な上に

私より胸が大きいのはちょっとずるいと思う…。
「あの方たち、
十中八九、遺伝子改造新型鬼化ウィルス、
つまりディアボロに感染してるはずなので、
科学部に回しときましたわ」
そう言われて振り向くと、3人の姿はもう無かった。
確かにディアボロに感染しているなら、
処置は早い方がいい。
なんといってもディアボロというタチの悪いウィルスは、
ワクチンがまだ完成していないんだから…。
ワクチンの開発ができるまでは、
感染者は低温体温療法による一種の仮死状態
＝凍結処分にしておく以外に方法がない。
（それにしても音音って、
ホントやることにソツがない）
私と音音は同じ化野家の家系に連なっている。
彼女の家の方が本家筋で、
契約しているあやかしは、地狐の静葉さま。
本来ならば、容姿、能力、家柄とか、どれをとっても私より上な音音が、
弾正尹になるはずなんだけど、
子供の頃のちょっとした手違いで、
音音は私の補佐に回ることになった。
でも、音音はその方が性に合ってるって言ってくれて…。
音音になら安心して背中を預けられる。
なんて、ひとりで感慨にふけっていると、
二人の携帯が同時に鳴る。
「生徒会長から……、
やっと犯人の目星がついたみたいですわね」

第４章　その３につづく

第４章　その３

「だれ？　このヒュースケンって？」
＞ｉ１０９４６―１４８９＜
メールに犯人として名指しされた外国人”ヒュースケン”という名前には
まったく聞き覚えがなかった。
いっしょに送られてきた画像は
江戸時代ぐらい昔の人が描いた馬に乗ったヒュースケンの絵だったけど、
写実性は全くなくて、何の参考にもならない。
「幕末にアメリカ公使ハリスの通訳として来日して、
麻布で薩摩藩士に斬り殺されたアメリカ人男性ですわ」
「…はぁー、音音、ホント細かい歴史のこと、
良く覚えてるね。でも、そんな死人がなんで…」
「誰かさんが復活させたんだと思いますわ。
得意のキセキとやらで――」
その声を遮るように、キテレツなイントネーションの男の声が響いた。
「ｏｈ、誰かさんとは失敬な。
我が主はホントにスバラシお方デース。
故国にも帰れず、彷徨（さまよ）っていた私の魂をお救いくださり、
肉体に戻してくださったのですｙｏ！」
いつの間にか前方に、
割と筋肉質で、メキシコ人ゴンザレスっていう感じの
ごっつい顔つきの外人の男が立っていた。
「弾正尹・那須野結繪殿と
弾正忠・化野音音殿デスね？
音音さん、あなたもいたとは、ちょっと計算違いですが、

ま、いいでしょー。お初にお目にかかりマース。
私、オランダはアムステルダム生まれのアメリカ人、
ヘンリー・コンラッド・ヨアンネス・ヒュースケンと申します。
以後よしなニ」
「名前ながっ！
なに？　この良く喋る人…」
「結繪ちゃん、
彼がリビングデッドのヒュースケンですわよ」
「えっ！？　さっきの絵の人？
全然似てないじゃんっ」
それを聞いていたヒュースケンは、
「……まったく…、
あの絵デスカ。あの絵も酷かったですガ、
今度は生きた死人扱いですか…ふー…」
とひと息ついたかと思ったら、
額に青筋をたててていっきにまくし立ててくる。
「この国の野蛮人どもは、
私をカタナブレードで斬殺し、
あろうことか異教のテンプルに葬ったんでス！！
そのうえ、キセキにより復活した私をリビングデッド呼ばわりとは
！
まさに神をも恐れヌ行いなのデース！！！！」
なんか目つぶって、握りしめた拳がぷるぷるしてる。
ナルっぽいよこの人…。
「１５０年ぶりに蘇ってみレば、
この国では、まだマダやおよろずという
異教の神とその信徒どもが跋扈（ばっこ）してル様子。
とりあえず、鎌倉に来る途中、
横須賀線で見かけた、
無学で無軌道で無宗教でキレやすそうな若者を

コンヴァーションさせて連れてきましたヨ！」
それを合図にしたかのように、
ガサガサという音といっしょに、
ヒュースケンの背後の山から、鬼どもが数体現れた。
「こんばーじょんってなに？」
「宗教とか宗派とかを変えさせることですわね」
「ディアボロに感染させて？」
「そのようですわね」
そんな会話をしながら、油断なく周りを伺うと
山の中にまだかなりの気配がする。
２０体はいるなぁ…。
「こうも簡単に西御門の結界を破られるなんてね」
「結界は生きてますわね。
――来ます。左の７体をお願いしますわ」
鬼化しちゃうと、筋力は数倍になるし、
凶暴化した上に恐怖心が無くなるから始末が悪いんだよね。
オマケに元々人間だから、
派手に壊すことも出来ないし…。
「先ほど、生徒会長にメールを送りましたので、
間もなく援軍がくるかと――」

第４章　その４につづく

第４章　その４

「ＨＡＨＡＨＡ！！
ミーも先日蘇ったばかりデスが、
ケータイが便利なグッズだということは知ってマース」
「……」
幕末の人だっていうから
時代遅れなヤツかと思ったけど、
そいえばコイツは遺伝子操作したウィルスをばらまいてるんだったけ…。
「主から頂いた、この聖なる機械（マキナ）で
西御門結界の中にもうひとつ結界をはり、
電波は遮断させていただいてマース！」
そう言ってアンテナが３本もある
トランシーバーみたいな携帯ジャマーを見せるヒュースケン。
「あれはたぶん、電波法に抵触しますわ」
冷静につっこむ音音に、
「主は超法規的存在なのでノープローブレムでーす。
税金もかかりません」
とヒュースケンがマジレスをつける。
それを聞いて音音が、
「うらやましいですわ…」
と心底うらやましそうに言った。
（そいえば、音音の家はやたらでかいから、
固定ナントカ税が大変とか言ってたな…）
そんなことを考えつつ、
迫ってくる鬼たちの攻撃を右へ左へとかわしながら、
じりじりと後退していく。
「援軍来ないみたいだね」

「では、仕方ないですわね」
音音とアイコンタクトすると、私は愛刀―＜小狐丸＞を天に掲げて、
音音も愛刀―＜狐ヶ崎＞を地に向けてそれぞれの守り神の名を呼ぶ。
「天狐・葛葉ねえさま！」
「地狐・静葉ねえさま…」
すると、ふたつの光り輝く珠が中空に現れ、
絢爛（けんらん）な巫女服を着た、
狐の耳としっぽを持ったふたりの女性が現れた。
「静葉ちゃん、久しぶりのお呼びと思えば、
周りは鬼だらけなのです」
＞ｉ１０９７５―１４８９＜
「ちょっと多いですね…。
今夜は大山阿夫利神社門前のお豆腐屋さんから、
あぶらあげでもお取り寄せいただいて、
ごちそうしていただけたりするのでしょうか？」
静葉ねえさまにそう聞かれて、
「たぶん問題ないと思いますわ。
生徒会長に奢（おご）らせますので、
どうかお力をお貸しくださいませ」
と、音音はきっぱり言い切った。
「了解なのです！　静葉ちゃん…」
葛葉ねえさまがそう言うと、
静葉ねえさまが尾の毛を数本抜いて、ふっと吹く。
すると、光の矢がヒュースケンと鬼たちのアゴ２カ所と
手の親指の付け根に突き刺さる。
「静葉ちゃんの経絡針麻酔は良く効くので、
みなさんすぐ動けなくなるのですよ」
葛葉ねえさまが、涼しい顔で解説してくれる。
みるみる鬼達はがっくりと膝を落とし、その場に倒れ込んだ。
ヒュースケンはと言えば小刻みに震えてはいるけど、

何とか立ちつづけてる。
私はヒュースケンにつかつかと近づくと、
持っていた携帯ジャマーを小狐丸の石突きでつついて落とすと、
ジャマーの上に踵(かかと)を落としてたたき壊す。
それを何も出来ずに見ていたヒュースケンが、
「Ｍｙ　ＧＯＤ――！！！！
主から頂いた聖なるマキナになんてことを！！
この罰当たりめっっ！！」
そう叫んでブチ切れた。
あー、ちょっと挑発しすぎちゃったかな？
ビキビキと音を立ててヒュースケンの筋肉が盛り上がり始める。
自由を奪ってた静葉ねえさまの尾の毛が抜けて、
ヒュースケンが完全に自由を取り戻しちゃった…。

第４章　その５につづく

第４章　その５

さらに、何か技を繰り出すつもりなのか、
ヒュースケンの右腕が
バチバチと音を立てて放電現象をおこしてる。
こちらは、ただ待ってるのも芸がないので、
「マッチョは女の子に嫌われちゃうよ～」
と茶化してみる。
「ぬううぅ！！　使徒に対して
どこまでも傲岸不遜なその態度っ！
極東の三等人種に災いあれっ！
天罰覿面（てんばつてきめん！）
Ｔｈｅ　Ｌａｓｔ　Ｊｕｄｇｅｍｅｎｔ――――ッ！！
（ザ・ラスト・ジャッジメント！！）」
怒りで顔をまっかにして、
そう叫びながら帯電した腕を振り下ろしてくるヒュースケン。
その横っ面に、
上空から降ってきた男子生徒ふたりが、
思い切り蹴りを浴びせる。
「ぶるるぁあああっ！！」
ワケの分からない叫び声を上げて、
ヒュースケンは地面に転がった。
そのヒュースケンを蹴り飛ばした反動で後ろに飛んで、
くるくると三回転して着地した男子生徒は、
「日出（いず）る日ノ本に対し、
極東とは不遜（ふそん）な物言い。
バテレンの暴言聞き捨てならん！！
弾正府・猫部司（びょうぶのつかさ）
石田敏夫見参っ！」

と言い放ってポーズを取ると、
細長い手裏剣の一種・飛苦無(とびくない)を取り出した。
偵察や工作が主な仕事になる猫部は、
身の軽い生徒が多いんだけど、
そのなかでも司を勤める石田は、
弾正府でも1，2を争う機敏さで有名な生徒。
つま先でとんとんとリズムを取りながら、
いつでも攻撃できる態勢を取ってる。
「近衛二番隊筆頭三峯三狼…」
そう言って、すっと立ち上がったもうひとり、
三狼は私の幼なじみ。
頭の左に角が生え、
左手と左足が鬼化している。
その姿を見た血まみれのヒュースケンが、
「ヘイ、ユ――ッ！
ディアボロに感染して、
何故その力を制御しているのデスカ――――っ！？」
と驚いた様子で叫ぶ。
私と音音、それから十三部衆は、
契約した神やあやかしたちの庇(ひさし)護下にあるので、
通常の鬼化ウィルスが発現することはまずない。
だけど、ディアボロウィルスは、
そんな私たちでも感染すれば発現する。
それほど強力にディアボロは遺伝子操作されている。
三狼は、ここ数ヶ月に渡って発生している、
鬼たちが起こす一連の事件のさ中、
ディアボロに感染し鬼化してしまった。
普通なら凍結処分にされるところなんだけど、
三狼は発熱と自分の精神力でウィルスを押さえ込み、
今は力が必要なときだけ、

鬼化することができるようになっていた。
「精神一統何事かならざらん、
つまり気合いってヤツだよ」
黙っている三狼の代わりに石田がそう言うと、
飛苦無をヒュースケンの影に投げつけ動きを封じてしまう。
「か、体が…」
うめくヤンに近づいて、
とどめとばかりにみぞおちを思い切り蹴りつけると、
「ｖｅ…ｖｅｒｄａｍｍｅｎ…」
と呻いて、ヒュースケンは気を失ってしまった。
「ふぇ…ふぇあ…だ…？
音音、このおじさん、今なんて言ったの？」
「フェアダンメン、ドイツ語で“畜生”ですわ」
＞ｉ１０９９７―１４８９＜
「ど、ドイツ語…。音音、ドイツ語も分かるんだ～…」

その６へつづく

第4章　その6

そんな会話の横で、
三狼がヒュースケンに魔封じの護符を貼り付け、
駆けつけてきた弾正府の特別警備員に引き渡すのを、
静葉ねえさまが黙ってみている。
「ご指示通り西御門内の警戒レベルを特1まで上げました」
そう警備員に報告を受け、
「結構です。彼の血から、
ワクチンが出来る可能性が高いですわ。
絶対に逃がさないようにね」
音音がてきぱきと指示を出している。
そこに、生徒会長を兼任する
鳩部司宮本鳩太郎が現れた。
「敵の侵入を許したとのこと、
誠に申し訳ありません。早急に原因を究明すべく……」
と謝る鳩太郎に、
「あ、Qちゃん！」
と鳩太郎が嫌がる呼び方で答える葛葉ねえさま。
「鳩太郎です…葛葉さま……」
飽くまで冷静を装う鳩太郎だけど、
一瞬、額に血管で怒りマークを浮かばせたのを、
私は見逃さなかった。
そんな鳩太郎の気持ちを知ってか知らずか
葛葉ねえさまが食べ物の催促を始めた。
「まあ、そんな細かいことは気にしないのです。
それよりも、鬼どもを退治たのですよ。
力を使ったので、お腹がすいたのです。
大山阿夫利門前の大出豆腐店から、

あぶらあげを取り寄せてくださるとか…」
それを聞いて静葉ねえさまが、耳をぴくぴくさせてる。
＞ｉ１１０４３―１４８９＜
普段は物腰やわらかで、
眉目秀麗、沈着冷静な静葉ねえさまだけど、
ああ見えて、好物のあぶらあげとお酒のことになると、
目の色が変わるんだよね。
鳩太郎はにっこり微笑みながら、
「で、では直ちに早馬を――」
と言うと伝令にバイク便の指示を出す。
そして鳩太郎は、
にっこり笑ったその笑顔のまま、私の方に振り向くと、
「結繪さま、お店の指定は受けないでくださいと、あれほど――」
と小声で窘（たしな）めてくる。
「えっ！？　だって、それ音音が…」
「まぁまぁまぁ、
ヒュースケンなんていう大物を捕まえたのですから、
やんごとない筋もきっとお喜びですよ。
宮本会長の憶えもますます目出度いはず。
良いではないですか？」
と音音が割って入る。
「音音様がそうおっしゃるなら…」
「では、生徒会長は宴席の用意を……」
Ｑちゃんがあっと言う間に丸めこまれた。
私はダメで音音ならいいってどういうことっ！
「音音、ひどいよぉっ。
コレじゃ私が悪いみたいじゃない……」
振り向いた音音が、私の耳元で囁いた。
「ごめんなさいませ。
そのかわり、このあとの宴席でのお席、

二狼さまのお隣にしてさしあげますから、ね？
よろしくて？」
／／／／／／真っ赤／／／／／／／。
二狼にいさまは、三狼のお兄さまで、
弾正府最強といわれる狼部に所属している。
斬馬刀という、
通常よりも長い刀を得物とする
狼部の長たる司（つかさ）をまかされるほどの腕前。
幼いころからずっと修行に出されていた二狼にいさまと
初めて会ったのは、
私が小六で、二狼にいさまが中学一年生のとき。
弟の三狼とはひとつしか違わないのに、
もうすっかり大人びて見えた。
二狼にいさまは、私の憧れの――初恋の人だったりする。

第5章につづく

第5章　その1

西御門学園の武道棟は、
結界のせいで、普通の人には四階建てにしか見えないけど、
実は鎌倉府条例違反の地上十四階建て。
その屋上には、
大小ふたつの辰狐池（しんこ）と貴狐池（きこ）を配した
純和風の空中庭園がある。
葛葉ねえさまと静葉ねえさまの妖力で、
季節は常に秋に固定されていて、
紅葉や曼珠沙華（まんじゅしゃげ）の鮮やかな赤が
いつも綺麗で風情があるなぁと思う。
そして、池の畔に佇む寝殿造りっぽい建物は、
私と音音、葛葉ねえさまと静葉ねえさまが住む二楽亭。
その二階の大部屋には、
弾正府の非番の人たちが集まって、今や宴もたけなわ。
「清酒大吟醸九尾狐」
「こちらは韓国のお酒、九尾狐（クミホ）マッコリ」
「中国酒の九尾狐香雪酒（シャンシュエエチュウ）▽　どれも美味しそうですわ♪」
三種類のお酒を目の前に置かれ、
満足そうな葛葉ねえさまと静葉ねえさま。
「中国でも韓国でも、九尾狐で通用するの？」
と聞くと、
「もともとご先祖の妲己（だっき）ねえさまが、
古代中国の殷でちょっと悪さなさっただけなのですけど…。
たぶんその記憶が東アジア一帯で
連綿と受け継がれているに違いないのです」
とすでに酔いが回り、
ちょっと着崩れて艶めかしい感じになった葛葉ねえさまが教えてく

れる。
「ひとつの国が滅びるのを、
ちょっと悪さというのは、どうなんでしょうね、あは、あははは」
「仙界まで巻き込んでますしね…」
音音と静葉ねえさまが、
ちょっと縦線が入った感じで笑う。
「まっ、そんなことはいいから飲むのです～」
そう言うと、静葉ねえさまに大きな杯――って、
まるで優勝したお相撲さんが飲むようなおっきな杯！
――を渡す葛葉ねえさま。
＞ｉ１１０６５―１４８９＜
静葉ねえさまも、
こともなげにその杯を受け取るし……ｗ。
そこへ給仕とかお掃除とかしてくれる
メイド服を着た狐耳メイドさんとか、
日本髪に髪を結って着物を着た狐耳芸者さんたちとかが、
一升ビンからお酒をそそぎ始めてるっ！
「では静葉ちゃん、ぐぐ～っと▽」
いっぱいになったところで、葛葉ねえさまが勧める。
「では▽　いただきま～す」
あっという間にイッキ飲みしちゃう静葉ねえさま。
良く溺れないなぁ…。
「ぷは～」
「じゃあ、今度は葛葉さまの番ですわ」
杯を受け取り、
お酒をついで貰うと葛葉ねえさまも一気に飲み干した。
第５章　その２につづく

第5章　その2

しばらくすると座も和んできて、
すっかり酔っぱらった葛葉ねえさまと静葉ねえさまがカラオケに興じている。
音音は、
約束通り二狼にいさまの隣の席にしてくれたんだけど、
にいさまはヒュースケンの取り調べ中とかで、
まだ宴会には来ていない。
私の反対隣りには、三狼がいて、
黙々と食事をしている。
三狼は子供の頃から、ずっと一緒にいる幼なじみ。
だけど、三狼ってば、
鬼化ウィルスに感染してからは、あんまり喋ってくれなくなった。
私は昔みたいにおしゃべりしたいのになぁ……。
「…あぶらあげ、おいしい？」
と唐突に聞いてみる。
「うまいよ…」
「そ、そう。よかったね」
「うん……」
（あんたが何か言ってくれないと、会話にならないでしょ？）
全然会話が繋がらなくて、
心の中で怒っているとこへ、
『♪じゃ、じゃ、じゃ、じゃ、じゃ、じゃ…』
という、賑やかなイントロとともに、
広間のモニターに人魚のアニメのＰＶが流れ始める。
（あっ、音音がねえさまたちの
ぴちぴちびッちメドレーに巻き込まれた…）
このままここにいると、

私もマーメードの一員にされて、
“人魚コスプレ”と”振り”まで強要されちゃうのは時間の問題かも…。
こんな心配をしなきゃけないのも、
宴会が始まってから一時間にもなるのに、
三狼が何時までも食べ続けてるからだよ！
あんたとろくにおしゃべりも出来ないうちに、
宴会芸大会になっちゃったんじゃん。
「ね、もういっぱい食べたでしょ？
この部屋暑すぎるから、ちょっと涼みに出ようよ」
「あ、もうちょっと食べたら…。
鬼化(アレ)するとすっごくカロリー消費するから
食べないと血糖値が下がっちゃうんだ」
「けっとうち？」
「下がると意識が朦朧(もうろう)とする」
「…って、糖尿病の患者さんみたいなこと言ってないで…！」
あー、もうイライラするとノドが乾く。
ふと目に付いた
隣の二狼にいさまの席に置いてあったコップを
ぐいとイッキ飲みすると、それはお酒――っ！？
な、なんで～～！？
手で口を押さえて、
慌てて洗面所に行こうとした瞬間、
後ろからガッと肩を掴(つか)まれた。
「結繪ちゃ～ん～、
貴女もいっしょに歌うのです～」
ごっくんっ――。
あっ、うー、マズー……！！
思わず、お酒全部飲んじゃったよっ！！
狼狽(ろうばい)して振り返ると、

そこにはマーメードのコスプレをした葛葉ねえさまたちが居て……。
……って貝殻のブラはイヤ――――ッ！
逃げようとバタバタするものの、
葛葉ねえさまたちの力にかなうはずもなく…。
「ささ、着替えよっ▼」
そう言って、下から扇で仰ぐと、
何か下から光がわき上がってくる。
一瞬まぶしくて目を閉じると、
もう次の瞬間には貝ブラ&魚しっぽのマーメードにされていた…orz…。
＞i11097―1489＜
私がこんなことになってるのに、
三狼のバカは一心不乱にまだご飯食べてるし……。
二狼にいさまも来ないし、頭は少しぼーっとしてくるし、
もう、なんだかどうでも良くなっちゃって…。
カラオケがかかると葛葉ねえさまたちに合わせて踊って歌う。
あはは、おもしろーいっ……！
あれれ、なんで天井回ってるの……。

その3につづく

第5章　その3

どのぐらい時間がたったのだろう。
気がつくと、横になっていた私。
遠目に曼珠沙華（まんじゅしゃげ）の赤い花々が目に飛び込んできた。
別名狐花ーキツネバナー。
球根に毒はあるけど、
私はこの、はかなげで綺麗な色をした花が好き。
何時の間に連れて来られたのか、
池の向こう側には二楽亭が見えている。
そっちの方から、プリキョアの曲がかすかに聞こえてくる。
葛葉ねえさまたちのカラオケは、
魔法少女ループに入ったみたい。
音音、今晩徹夜は決定かな。
って、ミョーに寝心地良い枕の上で思う。
ん？　けど、ココどこ？
ガバッと起き上がると、
私の上に掛けられていた学制服が、
ばさっと音を立てて下の芝の上に落ちた。
え？　自分のおへそが見えるってことは…
まだ貝ブラコスのままっ！？
「きゃぁあ」
思わず声を上げる私に
「起きた？　もう大丈夫か？」
そう声を掛けてきたのは三狼だった。
どうやら私に膝枕してくれてたらしい。
三狼って、物静かだし、
自己主張もあんまりしないので、
大人しいイメージがあったけど、

ディアボロに感染してから、
なんか少し男らしくなってきた感じがする。
「急に倒れたからびっくりした。
未成年なんだから、お酒飲んじゃだめだ」
「好きで飲んだんじゃないもんっ！」
ズキ―――っん！
大声を出すと頭が痛い…。
こ、これが噂に聞く二日酔い？
まだ二日たってないんですけど…。
頭の回りで、ズキズキズキという効果音が
回っているような感じがする…。
「大丈夫？」
「ぜんぜん大丈夫じゃない…。
二狼にいさまのお膳のコップの中身がお酒で、
間違って飲んじゃったんだもん…。
でなきゃ誰があんな不味いもの……。
でも、膝枕してくれてたんだよね」
「……うん」
「うっ…あ、ありがと…」
「ああ。冷たい水もらってくる」
「…ま、待って」
そう言って、立ち上がった三狼の手を
反射的に掴んでしまった私。
「…あの…その…最近あんまり話せないし、だから、えーと…」
（私、何したいの？　なんで三狼を引き留めたの？
私……まだ酔ってる…？　ううん、もうお酒は残ってない
……ホントは私…）
＞ｉ１１１１３３―１４８９＜
沈黙の中、風に揺れる草の葉音だけが響いてる…。

第６章につづく

第6章　その1

ふたりが沈黙した一瞬の静けさのあと、
その静寂をやぶるかのように、
武道棟全体に警報音が鳴り響く。
『全館に警報！　敵襲です。
艮（うしとら）・大平山（おおひらやま）方面よりコードネーム出雲進行中。
従四位相当、ラフカディオ・ハーン。日本名小泉八雲。
蜂部（ほうぶ）・虎部は小隊単位でただちに出撃してください。
非戦闘員は至急……』
出撃を促すアナウンスが急を告げる。
小泉八雲？
今度はさすがに知ってる。
日本に帰化して『耳なし芳一』とか書いた人だ。
教科書で見た写真は割りと優しそうな感じの人だったけど…。
なんて考えてたら、
二楽亭の2階から文字通り飛び出してきた葛葉ねえさまが、
こちらに向かって文字通り飛んできた。
「結繪さん、大物の来襲なのです！
飛びますから、掴まるのです！」
「は、はい！　あ、でもその前に服を…」
＞ｉ１１１６３―１４８９＜
（さすがにこの人魚のコスプレで出撃するのは恥ずかしすぎるよ～っ！）
「あ、そうですね」
そう言って葛葉ねえさまは
さっきと同じように私を扇で扇ぐと
一瞬ひかりに包まれて、元の制服姿にもどった。
「では参ります」

「三狼、遅れないでっ！」
言いながら葛葉ねえさまの腕を掴む。
するとまるで体重などないかのように、
ふわりと空中に浮かび上がる。
音音と静葉様も合流してきた。
「結繪さん、今日は白と黄色のシマシマですのね」
「えっ！？」
後ろにいる静葉様にそう言われて、
パンツが見えちゃってることに気がついた私。
慌ててスカートを押さえても、
片手だとバタバタが上手く押さえられない～～～。
はっ、として下を向くと、飛んでいる私たちの下を、
木のてっぺんを飛ぶようにしてついてくる三狼が、
鼻血をハンカチで押さえている。
「！？／／／／／／／わ、バカ、三狼上見るなっ！」
「あらあらｗｗ、三狼さん鼻血ですか？」
静葉ねえさまが笑いをこらえながら茶化す。
「結繪ちゃん、暴れちゃダメなのです～！」
葛葉ねえさまがバランスを崩す中、
途中で着けたインカムから情報が入ってくる。
『蜂部（ほうぶ）前衛が出雲と接触します』
「こちらも間もなく接触します。
蜂部・虎部は一撃して市営テニスコートまで後退、
鹿部（ろくぶ）と合流し防衛線を構築してください」
音音は、そう指示を出した後、
こちらを向いて、インカム越しに戦略予想を言ってくる。
『結繪ちゃん、定石なら裏鬼門・未申（ひるじさる）から、
別働隊が侵入してくる可能性が大きいです』
「さすが音音！」
「軍略は音音さんの好きにしてもらっていいと思うのです」

音音は、こちらに目配せしてうなずくと、
『出雲は”囮”の可能性が高いです。
狼部は現状維持でヒュースケンを護衛。
鷲部・牛部は国大付属小学校陸上トラックに展開。
狸部・兎部は第二運動場にて迎撃用法陣を組んでください』
と指示を出していく。
その最中、森の中から殷々（いんいん）と声が響いてくる。

第６章　その２につづく

第６章　その２

《なかなか良い読みですね。
そう、目的はあくまで、ヒュースケンの奪還とした場合は、
それが正解でしょうな》
「姿を現わすのです、ラフカディオ！」
静葉ねえさまがそう告げると、
目の前にイキナリ、少しとぼけた感じの白人男性が現れる。
＞ｉ１１１１７７―１４８９＜
「これはこれは静葉様、おひさしゅうございます」
「１００年前に嗅ぎまわって調べ上げたことが、
何か役にたったのですか？」
葛葉ねえさまも、いつになくキツイ口調になってる。
「私に分かったのは『怪談』に書いたことだけです。
結局、ホンの表層のことしかわかりませんでしたよ。
ただひとつ収穫が有ったとすれば、
八百万とも言われる多くのあやかしが存在するこの国では、
行動原理など無いに等しいということだけでしょうか？」
「“囮”だということが見抜かれた割には、
落ち着いておいでですが…？」
静葉ねえさまが、ちょっと考え込むと、
はっとして顔を上げる。
「――まさか…。結繪ちゃん！
狼部に至急回線をひらくのです！」
「は、はいっ！」
その只事ではない様子に、
理由など聞くより回線を開く。
「二狼にいさま！
そちらの様子を教えてください！！」

『…ザ……ザザ……』
「にいさまっ！！」
これって……！？
私の様子をみて、不敵に笑う八雲。
「もう少し私にお付き合いいただきますよ。
私の配下どもの歌でもお聴きください。
出よ、聖歌隊（チャーチ・クァイア）！！
今日は木曜なので、第五調だ。
聖歌斉唱（ビザンチン・チャント）！」
いつのまにか現れた、八雲のうしろに従う男たちが、
耳をつんざくような高音で一斉に歌い始める。
今まで聞いたこともないような不快な音に、
やっと追いついてきた三狼配下の近衛の生徒たちがバタバタと倒れていく。
私と音音と三狼は思わず耳を押さえたけど、
平気な顔をしている葛葉ねえさまと静葉ねえさまを見て、
八雲がやれやれという感じで呟く。
「さすがにあなた達には効かないようですね…」
それを聞いた葛葉ねえさまが
うふふ、と笑いながら、
「貴様のような小僧の繰り出す技など、きくものですか。
音音ちゃん、ここは貴女と静葉に任せます。
私たちは弾正府に戻ります！」
と音音たちに告げると踵（きびす）を返した。
「いやいや、もう少しお着き合いいただきたい。
第二調！」
タクト代わりに振り上げた腕を振り下ろそうとした瞬間、
その腕にツタがからみついて、
八雲の動きを封じていく。
「う、な、何っ！？」

うろたえる八雲に、
微笑みながら、静葉ねえさまが余裕で答える。
「満月の夜は、植物も元気ですから…」
静葉さまは、月の狐なので、
満月の夜はその霊力が数段上がると言われている。
「葛葉ねえさま、結繪ちゃん、
ここは大丈夫だから、武道棟へ行ってくださいませ」
音音にそう促されて、
「お願いっ！」
とだけ告げると、
私は葛葉ねえさまの手を掴んで、
一目散に弾正府へ向かう。
「結繪ちゃん、完全に後手に回ってしまいました。
…あの方たちが、ヒュースケンの生死をいとわなければ、
ヒュースケンにアンチワクチンを
注入できればいいわけですから」
「アンチワクチン……ワクチンを無効化する…？」
「それだけ、ディアボロの秘密が大きいということでしょう…」
ヒュースケンを監禁してある武道棟の入り口前に着地すると、
警備をしている猫部（びょうぶ）の兵が私たちに気付いて、
司の石田敏夫が走り寄ってくる。
「おふたかた、いかがなさいましたか？」
「今、説明している時間はないのです。
ヒュースケンの元へ案内を。急きますっ！」
そう言われた石田は、
入り口の扉を開けさせるとエントランスを音もなく先を進む。
「ではこちらから…」
と言うとエレベータではなく、
地下へと通じる階段を下り始める。
地下三階に着くと、非常事態のため、防火シャッターが降りていた。

ただ、狼部の兵が詰めているにしては、
向こうの気配が静か過ぎる…。

第6章　その3につづく

第6章　その3

ロックを解除して
その横の出入り口から中に入ると、
思わず息を飲んだ。
内部は寒く、蛍光灯が何本も割れ、
ドアや換気口のところどころが凍結し、
粉砕されたりヒビが入ったりしたコンクリートの壁が、
非常灯の明かりに照らし出されていた。
そして、弾正府十三部衆でも最強と言われる狼部の兵が、
そこかしこに倒れている。
「ううっ……」
という、うめき声が聞こえた方に石田が駆け寄って、
兵を助け起こす。
「おい、どうした？　何があった！？」
兵は苦しい息の中で、
「……こ、氷の…ツアー……」
とだけ言うと昏倒した。
「…ツアー…？
――あり得ないことですが、アヤツだとすると、
少し厄介なのです…」
葛葉ねえさまでさえ考え込むような相手が奥に…。
この状況で、二狼にいさまだけが無事とは考えられない…。
「二狼にいさま…」
心配で取り乱しそうになるのを、
愛刀小狐丸の柄に手を掛けることでやっと押さえる。
とにかくヒュースケンを入れた結界牢に行かなければ…。
結界牢は、この三階の一番奥にある。
気を探りながら、奥へと進んでいくと、

その部屋から、二狼にいさまの気と
それを圧倒するかのようなまがまがしい気が感じられる。
結界牢には最早扉もなく、
そこから一人の男が出てきた。
＞ｉ１１２１４―１４８９＜
「ニコライ…日ノ本で死んだわけでもない貴方が、
何故日ノ本にいるのです？
貴方は、間違いなくエカテリンブルグで赤軍に…」
「ダー、そうだ！　まさに貴女の仰るとおりだ！
忌々しいボルシェビキどもに災いあれっ！
『反革命・サボタージュ取締全ロシア非常委員会』とかいう秘密警察が、
我と我が妻や子を含むロマノフ家の者七名と従者三名、更に医師までをも
エカテリンブルグのイパチェフ館、
その地下で殺害しおったのは紛れもない事実…」
ニコライと呼ばれた男は、
モールや勲章のついた、ぴったりとした軍服を着こなしていた。
「――だが、そのソビエトも最早なく、
今や我は極東オーソドクス教会に、
新致命者として聖人に列せられた…」
「…なのに何故ここに……。
この日ノ本で死んだわけでもない貴方が、
何故鎖国結界を施した日ノ本に入れるのですか……？」
そう言いながら、一瞬思案した葛葉ねえさまだったけど、
うなるように呟く。
「……あ、大津事件…」
「ダー、その通り。
大津にある、我が血に染まりしハンカチーフを依代にして
日本に帰参した次第――」

「ですが、ここへはどうやって入ったのです！？
上の兵たちに見とがめられず、
ここへ入ることは、それこそ不可能なはずですっ！！」
ニコライ二世が、
葛葉ねえさまの足下に
プリントアウトした地図を投げて寄越す。
「ランドサットからの衛星透過写真に、
八幡宮新宮裏手からここへの抜け穴があるのを見つけてね。
そこから侵入させて頂いたのだよ」
と後ろの壁に開いている穴を指さした。

第６章　その４につづく

第６章　その４

「ニコライ殿、おしゃべりはその辺で…」
そう言いながら、
ヒュースケンを抱えるようにして結界牢から出て来たのは、
茶筅髷を結った侍姿の外国人だった。
「葛葉どの、お久しゅうござる」
「貴方は…三浦按針――貴方まで出張っているなんて…。
…そこまでディアボロの秘密は重大なのですか…」
そう言った刹那、ふたりを追いかけるようにして、
よろよろと出てきたのは二狼にいさま！
無事だった！
無事でいてくれた！！
「き…貴様の相手は俺だ！　こっちを向け！」
六尺の斬馬刀を引きずり、頭と片腕から血を流し、
立っているのもやっとという痛々しい二狼にいさまがそこにいた。
「にいさま、ここは私がっ！」
言いさま、小狐丸の鯉口を切り、構える。
＞ｉ１１１２３１―１４８９＜
「結繪ちゃん！　ダメです、
貴女がどうこうできる相手ではないのです！」
葛葉ねえさまの言うことはわかる。
でも今ここで私が引いたら…。
「拙者とて、婦女子を斬るのは気が乗らん。
用件もすんだことだし、今日の所はこれにて御免！」
そう言うと、そこから侵入してきたという穴へ、
ニコライと共に消えていく。
後を追おうとする石田を葛葉ねえさまが引き留める。
「それよりも、けが人の手当を急ぐのです」

そう言うあいだに、穴の中で爆発があり、
岩や土砂が崩落する音が響き渡る。
その音で、はっと我に返った私は、
慌てて二狼にいさまのそばに駆け寄ろうとするが、
その間に二狼にいさまが床へと崩れおちる。
「にいさまっ！　しっかりしてください！！」
「二狼さん！」
「…葛葉様、
やはり、三狼の方が資質は上のようです。
結繪様、これを三狼に――」
そう言うと六尺斬馬刀を私に渡し、
目を瞑(つぶ)り、苦しそうに喘(あえ)いだ。
葛葉ねえさまの足下が光り、
方陣が浮きだし、癒しの呪文が詠唱される。
でも、二狼にいさまの傷はなかなかふさがらない。
しばらくじりじりとした時間がながれ――、
やっと傷が少しふさがって来た！
そう思った瞬間、
二狼にいさまの身体は筋肉が盛り上がって…。
これってにいさまも！？
「うそ……」
「ディアボロ！？
按針の刀にウィルスを塗布(とふ)していたに違いありません。
こ、これでは……」
葛葉ねえさまが呻くように呟いた……。
「そ、そんな、二狼にいさま！
イヤです！　にいさまっ！！」
私の悲鳴が地下室にむなしく吸い込まれる…。

第7章につづく

第7章　その1

三峯家の墓に花を供える。
私の傍には、
葛葉ねえさまと静葉ねえさま、音音のほか、
二狼にいさまから引き継いだ
狼部司の証・六尺斬馬刀を持った三狼がいた。
「二狼さんの敵はきっと討ちますからね…。
どうか安らかに…」
「葛葉ねえさまっ！
縁起の悪いこと言わないでください！
二狼にいさまは、入院してるだけなんですから！」
「そうですわ、あのとき、
静葉ねえさまの指示で、
真っ先にヒュースケンの血液サンプル取っりましたから、
ワクチンも一応完成しましたし…」
一応というのは、
私や音音、十三部衆の様に霊的に加護がある人には使えるんだけど、
普通の人には強すぎて使えないらしい。
「二狼さんも、きっとすぐに元気になりますわ」
＞ｉ１１１２５３―１４８９＜
二狼にいさまは、
最初のワクチンの被検体を申し出て、
まだ傷は治りきらないものの、
ディアボロの驚異からは殆ど解放されていた。
今回の件では、
幸い誰も死ななかったものの、
怪我人続出で立て直し中の狼部は、
三狼が司代理になっている。

三狼はあくまで代理だと言い続けてるけど、
二狼にいさまのところへ
お見舞いに行ったとき、
＜ディアボロを殲滅したことでも分かるように
霊的ポテンシャルは三狼の方が上です。
ヒュースケンの件では、誰かが責任を取らないといけないですしね。
今後は三狼の補佐に回るつもりです＞
と言ってた。

今日はお彼岸なので、
ここ十二所（じゅうにそ）にある弾正府の霊園に
ちょっと早いお花見もかねて、
みんなでお墓参りに来たというわけ。
半月前の敵の襲来のあとも、
ディアボロに感染した人たち＝鬼たちによる事件は
相変わらず散発してるけど、
極東オーソドクス教会の連中自体の動きはぱったりと途絶えている。
彼らは確かに強力なんだけど、
八百万と言われるほど多いこの日本のあやかしたちのはる結界の中
では、
有る程度の時間しか活動ができないし、
人数も圧倒的に少ない。
まるで地震のように、１回大きな活動をすると、
しばらくは身動きができないということらしい。
しかも、この前のような大規模な戦闘になると、
力を連続して行使するために、
彼らの”主”が残したかなり強力なパワーアイテムを
使用しているはずだった。
彼らに使用できるアイテムも限られていて、
日本のものでは力を引き出せない。

今回使われたのは、
成田から持ち込まれた聖遺物のひとつ、
ゴルゴダの丘で救世主を杭に打ち付けた
＜聖釘（せいてい）＞だったことが、
残された痕跡から分かっていた。

第7章　その2につづく

第7章　その2

ぽかぽかした春の日差しの中、
霊園の隣にある公園では、桜が良い具合に八分咲き。
お墓参りが終わると、
二楽亭の狐耳メイドさんたちが宴会の準備をして待っていて、
そのまま花見宴会へなだれ込んだ。
その席で、鳩部司兼生徒会長のQちゃん先輩が、
「――結局、成田から<聖釘>を持ち込もうとした男は、
結界に阻まれたのが死因のようです」
と報告すると、
「で、その遺品を受け取ったのが、
ゾルゲだった可能性が高いと…」
と音音が続ける。
「でも、ゾルゲって、
ナチスを装った共産主義者だったのでは…？」
音音がそう問い返すと、
「ダブルスパイどころか、
本当は第二契約者・極東オーソドクス教会の手先、
つまりトリプルスパイだったっていうことです」
静葉ねえさまが解説してくれた。
オーソドクス教会が唯一の主を信奉する宗教団体なのはわかるとして、
ゾルゲや“せいてい”なんていうのはよく分からないんですけど…。
なんて考えてる間も、
難しい言葉が私の上空を飛び交っている。
私、弾正尹なのに、
こんなことでいいのかな？　と少し不安に思う。
あやかしたちが結界をはる日本。

本来地の利はこちらにあるはずなのに、
あの連中のパワーに押されている。
頭が足りないなら、
せめてその分体力が有ればいいのに…。
先代の弾正尹だった美沙おばあさまと
三狼の弦一郎おじいさまが、
相撃ちに近い形でシーボルトは封滅したけど、
二対一で、しかも命がけじゃないと倒せない相手なんて……。
そう考えると、
自然と額に皺が出来る。
「結繪ちゃん、元気ないのです…」
私の考えこんでるので、
心配した葛葉ねえさまが声を掛けてくれる。
「げ、元気いっぱいです！」
「そう？　元気ならいいんですけど。
結繪ちゃんが沈んでるとみんな盛り上がらいはら――」
あれ、葛葉ねえさま呂律（ろれつ）が回ってないんですけど…・
と、いうことは…相当出来上がってる！！
「だから、ね？」
というと葛葉ねえさまが言い、
扇を下から仰ぐようにすると…。
ああっ、やだこれ！
この前の宴会のときに変身させられたときと同じ……！！
「貝殻ブラはイヤ――――っ！！」
＞ｉ１１１２９７―１４８９＜
＞ｉ１１１２９８―１４８９＜
私の恥ずかしさとは反比例するように、
その夜の宴会も、私と葛葉ねえさまによる、
『うにものがたり』のコスプレデュエットで、
大いに盛り上がったのでした…。

第1話　おしまい

第2話「酒　虫」その1

「音音～！　明日のお昼、
中華料理が食べたい～。テーブルが回るヤツ～～！」
何故といわれても困るけど、
麻婆豆腐が食べたくなった私。
麻婆豆腐と言ってもフツーの麻婆豆腐じゃなくて、
花椒（かしょう＝ホアジャオ）を使って
四川料理独特のピリカラ味になってる麻婆豆腐。
だからテーブルがまわる店じゃないとダメ。
「四川麻婆豆腐ガ食べたいの」
「はいはい、結繪ちゃんがそう言うなら、
中華街で良いお店を予約しますわ。
三狼も行きますわね？」
「…行く…」
「三狼、最近口数が少ないなぁ。
もうちょっと明るくしてれば、女の子にモテモテだよ。
元がかわいいんだから▽」
そう私が言うと、三狼は不満そうに、
「…かわいいとか言うな…」
とむっつりと答えた。
三狼ってばホントに可愛いのに、
ディアボロに感染して以来、どうも愛想がないなぁ。
「あら、三狼…。
あなた、いつから結繪ちゃんに、
そんな無礼な口をきくようになったのかしら…」
三狼に対してあからさまに対決姿勢で言い放つと、
音音が私の腕に自分の腕を絡ませてくる。
「じゃあ、結繪ちゃんは私がもらっちゃうことにいたしましょ～っ

と▽」
そう言いながら、手のひらで胸を触ってくる。
「うぁっ……腕はともかく、胸を触るな音音！」
ふたりのケンカに私を巻き込むな！」
と音音を引きはがそうとしていると、
後ろから声を掛けられた。
「私たちも参ります♪」
声の主は、
五本の尻尾と狐の耳がかわいい葛葉ねえさまと、
四本尻尾に狐耳の静葉ねえさま。
このふたり、
私と音音の守護妖（あやかし）で、
御歳は６００歳に近いらしい。
最近は、狐耳とか狐のしっぽとか生えていても、
コスプレが世間一般にも認知されているので、
『ちょっと不思議な人』ぐらいにしか思われないので、
いつも通りの巫女服姿で、どこにでも行けて便利。
「わ、わかりましたわ、
では、５人分で予約いたしますわね…」
音音の顔にタテ線が入って、あぶら汗をかいている。
ねえさま方は、かわいらしい姿に似合わず大食いで大酒のみなので、
鎌倉でも屈指のお金持ち、
化野本家の長女音音のおこずかいとはいえ、
多少は痛いらしい。

翌日――――。
中華街の派手な入り口、
善隣門の前で、
音音の家のリムジンから降りた立った私たちは、
音音が先頭に立って案内してくれる方へと歩いていく。

>i11372―1489<
あちらこちらから、
ニンニクや生姜を炒める匂いや、
甜麺醤やザラメの香ばしくておいしそうな匂いが漂ってくる。
私がスポンサーだったら、
とりあえず歩く胃袋のみたいなねえさま方には、
美味しそうな肉まんを勧めて、
少しでも安く上げようとするところだけど、
さすが生まれながらの化野家のお嬢様、
覚悟は決まっているようで、
目的のお店にまっしぐらに進んでいく。
「こちらですわ」
音音がそう言って立ち止まったのは、
香港路からちょと入った、それなりの大きさのお店だった。
でも、そのお店に一歩入るなり、ちょっとした違和感を感じる。
お昼どきだけに、お店の1階にはたくさんお客さんが入ってたけど、
通された結構広い地下1階にはひとりもお客さんがいなかった。
違和感が更に増していく。
「ちょっと音音、
なにこのお店。いったい何がいるの？」

酒虫　その2につづく

第2話「酒　虫」　その2

「先日、米カリフォルニア中部の
フレズノという街のチャイナタウンで『地下迷宮』が発見されて、
一騒動ございましたの。
その街は、昔から妖異の噂がたえない場所で、
街の地下には迷宮があり、
そこには妖(あやかし)が住むと言われておりました。
そこで本当に地下迷宮が見つかったので大騒ぎに……。
そして二月ほど前――
ここのお店の地下でも、
封印された地下室が発見されたんですの！」
「じゃあ、この地下にも地下迷宮が？」
「はい…」
「じゃあ、妖も…」
＞ｉ１１３１７―１４８９＜
とたたみかけるようにして聞くと、
「いたのですわっ！！」
と、間髪入れずに答える音音。
「きゃ――――！！　こわいです～」
出来るだけおどろおどろしい演出で
私たちを驚かそうとする音音の努力に、
ねえさま方ふたりはキチンとお着き合いして怖がってみせる。
そりゃ、このあとのご飯のスポンサーだからね、音音は。
「で、その妖って、何なのいったい？」
「酒虫ですわ」
「なにそれ？」
「芥川龍之介の小説にもなってますけど、
もとは中国の怪異を記載した本

『聊齋志異』に載っていた伝承ですわ。
水を入れた甕の中に酒虫を入れておくと
そのお水が良い酒になるそうなのですが、
これに取り憑かれると大酒飲みになってしまうとか。
昔の大富豪・劉大成がこの酒虫に取り憑かれて、
大酒飲みになってしまい、
それを治すために、
酒虫を体内から追い出すというお話ですわ」
「追い出すって、どうやって？」
「実に簡単なのですの。
しばらく宿主に酒を断たせて、
そのそばに酒のツボを置けば
酒虫がお酒を求めて、勝手に出て来るのですわ」
「で、ここにその酒虫に憑かれた人がいると？」
「はい」
「でも、これから断酒させるとなると、
随分時間がかかるんじゃ…」
「こんなこともあろうかと、
こちらが一昨日から断酒していただいてるこちらのご主人ですわ」
音音がそう言うと、
奥の部屋の扉を開ける。
そこには、ぐったりした表情のメタボリックなオッサンが
椅子に縛り付けられていた。

酒虫　その3につづく

第2話「酒　虫」その3

「酒～、酒飲ませてくれ～」
うめくオッサンを無視して音音が続ける。
「夕べから仕込んでおいたので、そろそろですわ」
「で、音音これで、いったいいくら貰うの？」
「うはっ！　な…何をおっしゃいますの！
わたくし、こう見えましても名門化野家の跡取りですわ。
お金なんて1円もいただきませんわ」
「ふーん…」
准公務員扱いの弾正府としては、
妖異を退治したからと言って、対価を貰うことはない。
でもまあ、ここでのご飯代ぐらいないら大目に見ようかな。
「で…では、さっそくかかりますわ…」
ちょっとあせりながら、
音音はバッグから取り出したシャンパンの栓を勢いよく飛ばした。
ポン、シュワー…！
という音とともに泡があふれ出して床を濡らすのを見た
静葉ねえさまと葛葉ねえさまのふたりは、
「きゃー！
ドンペリをこぼしちゃダメです～」
「もったいないですわ～」
と口々に叫ぶと、
どこからかmy杯を取り出して、
流れる出るお酒を受けて飲み始める。
「う～～ん、やっぱりドンペリ、おいしいですわ～」
「甘露なのです～」
と嬉しそうなふたりの声を聞いて我慢できなくなったのか、
「ぐえええぇ！　ぐぉおおっ！」

とオッサンが妙な呻き方をしはじめている。
あ、もしかしてこれ、酒虫が出て来る前触れかな？
身構える一同が見守る中、
オッサンの胃の辺りがモゾモゾして、
そのモゾモゾがノドのアタリまで来たと思ったら
急に静かになった。
身構えて5分、音音と顔を合わせると、
「三狼、見てきてっ！」
と三狼の背中を後ろから押す。
これぜったいトラップだもん。
三狼がおっさんの口をのぞき込んだ途端、
「ぐはぁああっ！」
というオッサンの呻きとイッショに、
口から芋虫のようなモノがモゾモゾと出てくる。
うわー、なんのホラー映画？？
気持ち悪すぎて思わず目をそらすと、
ねえさま方もがっくりと膝を着いて口を押さえていた。
音音だけは、用意していたお酒を少し入れたビンの口を開け、
タイミングを計っている。
いい加減三狼に絡みついたところで、酒虫にビンを向けると、
そいつは自分からそのビンに入っていく。
フタを閉めると、モザイクなしには見れない物体が
ビンの中でウニョウニョしている……。
＞ｉ１１４６４―１４８９＜
「Ｔｈａｔ　ａｌｌ、一丁あがりですわ」

酒虫　その４につづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1228n/

オリジナル伝奇ノベル「ニ楽亭へようこそ!」

2010年10月15日01時59分発行